是釋名、耳耏也、耳有一體、屬著兩邊、耏耏然也、

〔類聚名義抄二〕耳如始反、ミ、和ニ

〔增補下學集上二〕耳ミ、支體

〔書言字考節用集五〕耳一名幽田、肢體、腎之竅、

〔日本書紀二神代〕一云勝速日命兒、天大耳尊、

〔日本書紀六垂仁〕三年三月、新羅王子天日槍來歸焉、（中略）一云（中略）天日槍、娶二但馬出島人太耳女麻多烏一、生二但馬諸助一也、

〔身のかたみ〕第四、御耳は、御ぐしのはづれよりあり〳〵とさしいでたるは、みにくきものにて候、御ぐしのびんの脇より出たる筋を、十筋ばかり御とり候て、かみよりかゝりたる御びんを、やまと櫛にてみぐしけづりかけられ候て、うつくしうかゝり、耳はさし出候まじく候、

〔續世繼六志賀のみそぎ〕さがのみかど○嵯峨の御子に、隱君子と申けるみこは、御みゝにいかなることのおはしけるとかや、さてさがにこもりゐたまひて、ひき物のうちにたれこめて、人にもみえ給はで、わらはにてぞおはしける、

〔枕草子五〕辨のおとゞといふにつたへさすれば、きえいりつゝえもいひやらず、などか〳〵とみをかたぶけてとふに、○下略

〔枕草子九〕大藏卿○藤原正光ばかりみゝとき人なし、誠に蚊の睫のおつれるほども聞付給ひつべくこそ有しか、職の御さうしの西をもてに住し比、大殿の四位少將と物いふに、そばにある人、此少將に扇のゑの事いへとさゞめけば、今彼君だち給ひなんにをと、みそかにいひいるゝを、其人だにえきゝつけで、何とか〳〵とみゝをかたぶくるに、手をうちて、にくしさの給はゞ、けふはたゝじとの給ふこそ、いかで聞給ひらんとあさましかりしか、

〔源氏物語二十玉蔓〕よし心しり給はぬ御あたりにと、かくしきこえ給へば、うへ、あなわづらはし、ね